

那覇市農連市場痕跡プロジェクト

参加者：山本由美子（大津市在住 六十五歳 染織家）

不思議な映像でした。六人のベトナム人の若者が二人ずつ、三台のリキシャを海底の砂地の上で引こうとしています。息の続く限り引いては、海面に上がり息をつぎます。彼らは水の抵抗でなかなか上手く進めません。ただあがいているかのようにも見えます。だんだん二人の息が合ってきて、少しずつ前に進み出したところで、岩礁が現れ、リキシャの動きを遮ります。彼らは苦勞しながらそこを乗り越えていきます。

岩礁を過ぎると、かなりの深さになり潜るだけでも大変です。しかし彼らは思ったより随分器用にリキシャを前に進めていきます。砂地が途切れ、初めよりもっと大きな岩礁の手前まで来たとき、彼らは一斉にリキシャを捨てて、泳ぎ出します。

その視界の先に、白い蚊帳が現れてきます。あちら、こちらに、ポツンポツンと見えていた蚊帳は、その数をだんだん増やし、多くの蚊帳が海底を埋め尽くし始めるところで映像は暗転し終わります。

私は三十四年ぶりに沖縄を訪れ、思い出のある農連市場に立ち寄りました。ここで思いもかけず、この不思議な映像を見たのです。まるで何かの暗示のようでした。映

像は象徴的で、人によってどのようにも受け取れるのですが、ずっと織りの仕事に携わってきた私には、あの白い蚊帳は隔離されたシェルターかお墓のように見えたのです。かつて蚊帳は大麻の繊維で織られるものでした。大麻はとても神に近い素材です。

ここは、「ワナキオ」というアートイベントを行っていたのですね。二つ隣の「生活館」で、市場の痕跡を収集した展示を見て、私も参加したくなりました。展示室で高木さんの記憶を綴った文章を読んだこともありましたが、私自身、ここで少し自分の気持ちを整理してみたくなりました。

ワナキオの地図で農連市場広場と言われている所の片隅にある、八角形の水飲み場の朽ち果てた蛇口跡を私は採集しました。実は、知人の七回忌のために沖縄に来たのですが、その方との思い出がこの蛇口跡にあるのです。その方はとても有名なので、皆さんご存じだと思いますが、染織家の金城正子さんです。

金城さんと初めて出会ったのは、私が美大を出てすぐの年、林孝造先生の工房に入った時でした。彼女は既に一年前に工房に入っていました。私より六歳年上で美大の先輩でしたが、沖縄の大学に通った後、不思議なことに美大では絵画を専攻して、卒

業後染織の道に入ったとのことで、まだそれ程技術を身につけてはいませんでした。私は一応四年間、あまり真面目な学生ではありませんでしたが、織りの経験がありましたから、時々彼女から質問をされる方でした。彼女はそんな時、私がかなり年下なのに、本当に素直に気持ちよく質問してきました。すぐに私たちは仲良くなりました。

工房での三年間が過ぎた頃、彼女は目黒で自分の工房を開くことに決め、一緒に仕事をしないかと誘ってくれました。私はまだ工房で学びたいことがありましたので、二年ほど待って欲しいと言いました。

一年半後、彼女は沖繩に戻って工房を続けたいと言いました。以前の約束もありましたし、私自身沖繩の素材に興味がありましたので、思い切って一緒に沖繩に行くことに決めました。両親は反対しましたが、必死で説得しました。オリンピックの開催に合わせ東京の町がどんどん都市化する時でした。そんなまちの変化に両親たちも戸惑っていたのでしょうか。結局沖繩行きを許してくれました。

沖繩に着いたのは十月でした。殆ど真夏のような日差しの中で、私たち二人は、首里金城町にある彼女の実家の屋敷跡に立っていました。腰の上まで草が茂り、壊れかけた住居はひっそりしていました。彼女のご両親は那覇に引っ越され、ここはもうしばらく使われていません。二間と小さな台所しかない小さな仮設住宅でしたが、工

房を始めるのには充分でした。

私たち二人は希望に燃えながら、黙々と掃除や修理をし、ひと月後には一人目のお弟子さんも加わっていました。首里高校の染織科を出てすぐの若いお嬢さん、きみ子さんです。金城さんの遠い親戚のようでした。

染場や藍瓶、機も人数分そろい、やっと工房らしくなったのは、ほぼ一年後の夏でした。道具は殆ど自分たちの手作りでした。林先生の工房では道具づくりから教えていただいたので、この時は本当に助かりました。お弟子さんがもう一人加わり、四名の工房になりました。彼女もきみ子さんと同級生でした。石垣島の出身の方でした。

工房を開設して三年間程は、本当にのんびりとしたペースでした。楽しい思い出もいっぱいあります。博物館で一日中御絵図帳を見せていただいたり、喜如嘉まで知り合いの人に車を出していただいて、泊まりがけで芭蕉の里を訪れたり、読谷で花織りのことをおばあちゃんから伺ったりと、いつも金城さんと一緒でした。

庭では、芋麻や芭蕉を植えました。これは私の仕事でした。空いた場所にはお弟子さんも一緒に畑をつくり、野菜を作っていました。鶏も数羽飼っていました。

質素で半ば自給自足のような生活でしたが、二人のお弟子さんに少ないながらもお給料を出し、工房を維持していくのは大変だっただろうと思います。経営面はすべて金城さんが行っていましたので詳しいことは分かりませんが、私にも大変なのは分か

ります。着尺を作ってもなかなか売れない時代でしたから。彼女は親戚を訪ねて随分無理をして引き取って貰っていたようです。

それでも、彼女は沖繩に来てから、めきめき良い仕事をするようになっていきました。本当のことを言うと、東京時代の彼女の仕事はお世辞にもあまり綺麗なものとは言えなかったのです。彼女の作品の進歩に一番驚いていたのはおそらく本人よりもこの私の方だと思えます。正直に言えば、ちょっと私は取り残されてしまうような気分だったのです。

私は、織物の素材がとても気になる性質でした。沖繩に来たのも、苧麻や芭蕉、紬糸など、民芸館で見た戦前の沖繩織物の素材感の素晴らしさに惹かれたためです。彼女は緋や縞模様、組織織りなどに強く興味を持ち、二人はそれぞれの持ち味を出し合い協力して作品を作り上げていました。

畑仕事で少し調子に乗りすぎ、庭中、葉野菜だらけにしてしまったことがあります。その頃、経営の苦しさもあって、金城さんは高校の美術の非常勤講師を週に三日していました。その日、授業を終えお昼過ぎに帰ってくると、突然、葉野菜を市場に売りに行こうと言いました。

四名総出で刈り取り、リヤカーに山盛りの葉野菜を載せ、農連市場までみんなで行

いていきました。十一月とはいえまだ日中の日差しは強く、みんな汗びっしょりでした。工房を出たときはみんな陽気に話したり、歌を口ずさんだりしていたのですが、一時間半程かかって、やっと農連市場に着いたときには、全員の顔は真っ赤になって声も出ませんでした。

その時飲んだお水の美味しかったこと。そう、この八角形の水飲み場を私たちが独占してゴクゴク飲んでいたんです。ちょうど蛇口は四つ、四方向に四人がぶらさがるようにくっついていたのです。

当時、市場は露天で殆ど露地のままでしたが、この水飲み場の周囲の地面だけ、琉球石灰岩の多く混ざったコンクリートが打たれていました。

そのちよつとモダンな水飲み場は当時作られたばかりでした。そこは昔から井戸があったところで、井戸水をモーターポンプで汲み上げていたのです。ほんの少しだけ塩気がありました。本当に美味しい水でした。

早速、周りで野菜を売っているおばちゃんたちの真似をして、運んできた葉野菜を売ったのです。ところが、全部売っても四人のバス賃にもならないのです。私たちは顔を見合わせて笑ってしまいました。戦前の話で、市場に野菜を売りに来た人が、帰りにそばを食べるか、バスに乗るか真剣に考える、というのがありましたが、本当にそんな世界なものでした。

今考えると、金城さんは、そんなことは知っていて野菜を売りに行くと言ったのかなと思います。くたびれもうけでしたが、本当に楽しかったし、お腹の底から笑い合っていたのです。でも、やっぱり、分かっていたのかわかったのかな。そういう鷹揚なところがある人でした。

次の年から、急に忙しくなりはじめました。彼女の仕事が、かなり注目されてきたこともあります。沖展でも受賞を重ね、民芸館の新作展でも高い評価を得ました。彼女の色彩感覚は生来のものでしょうが、美大で絵画科に行ったことも、ここに来てなるほどと思わせるものがありました。彼女の色づかいによって織り上げられた模様は、単に美しいだけでなく、空間的な深さがあるのです。これは誰にも真似の出来ないものです。

彼女の仕事がどんどん良くなっていくのを喜びながらも、私は、自分一人取り残されていくような寂しさも感じていました。そして、その思いはちょっとしたことでもこじれ、ほんの些細なことで彼女と言い争ってしまったのです。あなたは素材に対して吟味が足りない、手に入る糸を安易に使っているだけよ、と、つい厳しい口調で責めてしまったのです。

何となく意固地になっていて、それ以来、なかなか昔のように率直に彼女に向き合えなくなっていました。ちょうどその頃、ちょっと惹かれた男性とうまくいかなかったこともあり、私は沖繩を離れる決意をしました。沖繩に来て三年半が過ぎた初夏でした。

翌年の民芸館新作展に、彼女は久々に芭蕉布を出品していました。その糸は大変艶やかで美しく、評判を呼んでいました。私は飛んでいって祝福したい気持ちで一杯だったのですが、なぜかもう一人の落ち込んだ自分がいて、結局何も行動を起こすことが出来ませんでした。

六年程経って、その間に結婚も離婚もしたのですが、私はもう一度織物に真剣に取り組んでみようという気になり、原始布の勉強を始めました。シナ布や葛布のような織物です。材料の入手が容易な関西に居を移し、一から出直すように仕事に没頭しました。金城さんのことは時々伝え聞き、彼女が沖繩の織物の第一人者になっていくのを嬉しく思っていました。

私の仕事も徐々に評価していただけるようになり、平成七年から二年間、イギリスの工芸美術学校に招かれ、客員研究員として研修をさせていただきました。帰国して三年ほどしてからです、やっと金城さんの計報を知ったのは。金城さんは私のイギリス滞在の間に亡くなってしまっていたのでした。私の所へもお弟子さんたちが連絡を

下さったようなのですが、古い東京の住所しか分からず、結局私の所には伝わらなかったとのこと。

喧嘩別れのような形で、そのままずっとお会いできないうちに、逝ってしまったなんて、本当に身の切られるような思いでした。

今年の十一月二十七日、七回忌にあたる今日、やっと私は沖縄に来て金城さんに謝ることが出来ました。もつとずっと前に出来たのに。大切な人との関係をこんな形のままにして、私がおむしやらにやっつけてきたことは何だったのかしら、と、呆然としながら、思わず、あの楽しかった記憶を求めて、ふらふらと農連市場まで来てしまったのでした。

農連市場は、屋根が付いて、当時の面影はありません。しかし、あの八角形の水飲み場を見つけたときは嬉しかった。涙が流れてどうしようもありませんでした。蛇口をひねって顔を洗っても、涙は後から後から流れます。あの時の蛇口はとうの昔に朽ち果て、今は新たに水道管が八角形の上に無造作に引かれ、二つだけの蛇口になっていますが、紛れもないあの水飲み場です。水道水のカルキの匂いが過ぎ去った時間を思わせ、又、涙が流れます。

余り長い時間、水飲み場を占領するわけにもいきません。よろよろと歩き出し、偶

然ここまで来て、誘われるままに先程の不思議な映像を見たのでした。

私が今まで打ち込んできたこと、原始布を織ることは、ある意味、既に失われてしまったことを、ノスタルジックになぞっているだけなのかもしれません。私の半生は片意地を張って頑なに生きてきただけなのかもしれません。そんな風に落ち込んでいた私を、あの映像は天から降りてきたように優しく包んでくれました。

リキシヤを引く青年は私でした。あがいていることが生きていることなのでしょう。こだわりを捨てて身軽になっても、その先に見えるのは、世界との関係が絶たれた死の世界です。この時なぜか、痛みとともに希望や誇りのようなものが私の内側から生まれてきたのです。